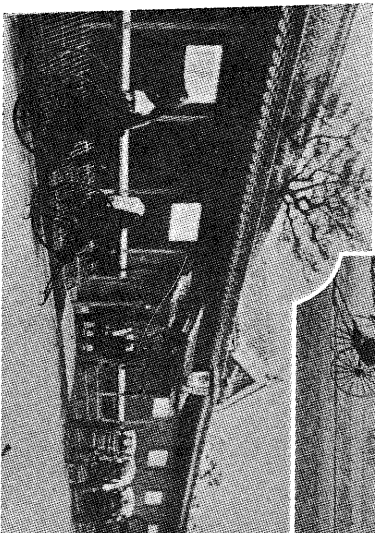
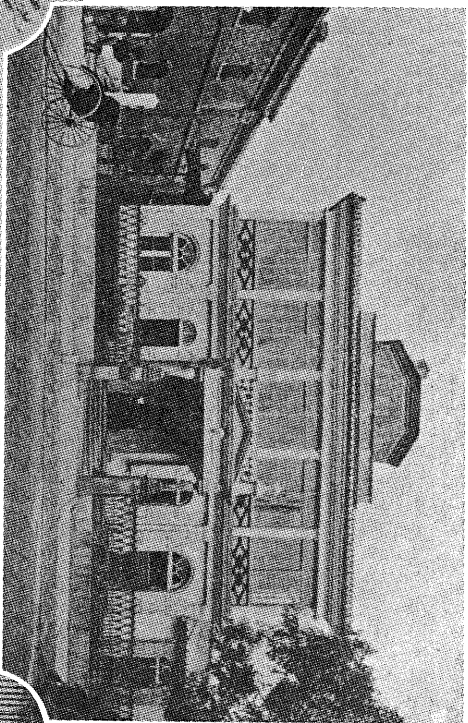
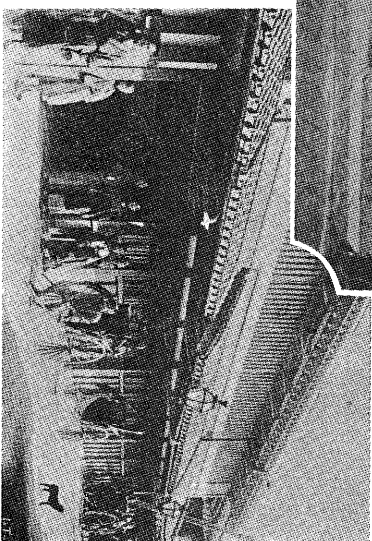


神戸支店



松阪支店



大阪支店

明治中期の三井銀行支店（神戸・松阪・大阪）

口絵 明治中期の三井銀行支店（神戸・大阪・大阪）

一八九三年（明治二六）七月一日、商法実施にともない資本金二〇〇万円の合名会社として改組された三井銀行は、一八九八年（明治三一）には五〇〇万円へと増資し、さらに一九一〇年代末にはその資金量を一億円強にまで拡大する。この間、支店・出張所の整理が進み、なかでも一八九四年三月には八王子・敦賀・青森・岐阜・千葉の各支店と八戸出張所が一挙に廃止されている。今回掲載する口絵は、この支店・出張所の大規模な廃止後に三井銀行が発刊した小冊子『三井銀行案内』（あるいは『三井銀行営業案内』）にのせられている写真を再録したものである。神戸支店、大阪支店は明治三三年版、大阪支店は明治三〇年版を使用した。一九〇〇年前後に、はたして同様の小冊子が何種類作られたかは定かでないが、現在三井文庫には明治二八年版、明治三三年版の計六種類が所蔵されている。これら小冊子にはこの他いくつかの支店の写真が付けられているが、なかでも上記の支店の場合には、それらが三者三様の軌跡を描き、支店の変転が写真にもっともよく表われているように思われる。大阪支店の建物が近世の三井両替店の系譜をひくことを鮮明に示しているものに対して、一八七一年（明治四）為替座三井組分店にはじまる新興の神戸支店の建物は二階外側にガラス窓を取り付けた近代的な洋風建築である。だが、この後も発展を続けるこれら支店とは対照的な支店が松阪支店である。大阪同様に近世からの系譜をひくものの一九〇一年（明治三四）には廃止の憂目をみる松阪支店は、建物の外側に塀をめぐらし静態的な様相をみせている。ちなみに、一八九七年（明治三〇）三月現在の大阪支店職員数が五一人、神戸支店三八人であるのに対して、松阪支店はわずかに六人にすぎない。大阪、神戸支店の興隆とは対照的な松阪支店の廃止は、日本資本主義の発展に促進されて三井家発祥の地との主要な紐帯のひとつをも容赦なく断ち切らざるをえないことを意味したのである。なお、先の小冊子は、三井銀行だけでなく三井物産、三井鉱山、三井呉服部、三井工業部、三井地所部などの営業案内をも併載しており、三井家全事業の広報・宣伝を目的とした小冊子といえる。当時の様子を正確に伝えるものであり、ぜひ一読を乞う。